東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター

Department of Practical Religious Studies
Graduate School of Arts and Letters
Tohoku University

第14号　2019年4月1日

目次

日本臨床宗教師会認定臨床宗教師授与式・・・・・8頁
臨床宗教師研修（種智院大学共催）の報告・・・・8頁
履修証明プログラム
　臨床宗教教養講座（第2期）の報告・・・・・・9頁
　臨床宗教実践講座（第1期）の報告・・・・9-14 頁
各地の臨床宗教師会の動向・・・・・・・・・15-18頁
活動報告／新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・19頁

特集
臨床宗教師と倫理問題・・・・・・・2-7頁
1.密室の人間関係（高橋原）
2.葬儀と臨床宗教師（大村哲夫）
3.組織の中での自分の姿（谷山洋三）
4.コメント（窪寺俊之）

「死生学・実践宗教学」専攻分野の新設

2019年4月、東北大学大学院文学研究科に「死生学・実践宗教学」専攻分野が新設されました。この専攻分野は、超高齢多死社会における生と死を取り巻く切実な諸課題に応える道を学問的・実践的に探求する場となります。人間の生と死に関する知恵を蓄積してきた宗教の知見を学問的に探求するとともに、心のケア（傾聴、グリーフケア、スピリチュアルケア）に関わる人材養成に取り組み、多職種の連携・協働による支え合いによって成り立つ社会の実現に貢献することを目指します。

大学院前期課程（修士課程）に在籍する学生は、死生学、宗教学、心理学等の関連科目を履修し、実践領域としてはスピリチュアルケア、グリーフケア、死生観、スピリチュアリティ等について学びます。実習科目を選択すれば、修了者は、日本スピリチュアルケア学会「スピリチュアルケア師（専門）」の受験資格、宗教者の場合は日本臨床宗教師会「認定臨床宗教師」申請資格を得ることができます。大学院後期課程（博士課程）では、上記内容をより専門的に研究し、博士論文を執筆します。実習科目を選択し、さらなる研鑽を積むことで、スピリチュアルケアやグリーフケアの臨床におけるリーダーを目指すことができます。

講座の新設は、「実践宗教学」の名前が示すように、2012年以来、実践宗教学寄附講座講座が取り組んできた臨床宗教師養成事業の社会的意義が評価された結果でもあり、これまでにご支援をいただいてきた各位にはあらためて感謝を申し上げます。当講座は引き続き、宗教者以外にも開かれた社会人対象の履修証明プログラムによって、臨床宗教師・スピリチュアルケア師の養成を行なっていきます。変わらぬご理解とご支援をお願い申し上げます。

2019年4月　実践宗教学寄附講座

特集

臨床宗教師と倫理問題

１.密室の人間関係（高橋原）
２.葬儀と臨床宗教師（大村哲夫）
３.組織の中での自分の姿（谷山洋三）
４.コメント（窪寺俊之）

特集の趣旨

「臨床宗教師」という新しい言葉が世に出てからまだ７年かそこらである。東日本大震災の直後には、困っている人たちの役に立ちたいというただその思いだけで日本全国からボランティアに馳せ参じてくる宗教者の姿が人々の心を打ち、被災地では「宗教者の方がいてくれるだけでありがたい」といった言葉も聞こえてきた。

そのような宗教者ならではの熱意を、より広く、医療や福祉の現場においても活かすために臨床宗教師が生まれ、資格認定制度の整備とともに、宗教者が心のケアを提供するということが徐々に違和感なく受け入れられるようになってきた。しかし、非常時の被災地と平時の医療現場では求められるものが異なるのは言うまでもない。ボランティアであれ、「師」を名乗って支援者のチームに加わるのであれば専門職としての振舞いが期待される。ただ善意の人としてそこにいればよいというのは甘えであろう。資格を手にして浮かれてしまうということはないだろうが、常に初心に帰り、臨床宗教師倫理綱領にまとめられている必要最低限の事柄を繰り返し胸に刻み直しておきたい。

以下は、臨床宗教師としての活動の中で生じがちな、宗教者ならではのトラブルを念頭にあらためて心構えを確認するものである。気がゆるんでいると誰しも陥る可能性がある落とし穴であるが、それは同時に、頭で学ぶことによって避けられることでもある。自分は大丈夫だと油断せずに自己点検の手がかりとされることを期待する。

実践宗教学寄附講座の教員三人による発題に続いて、チャプレンとしての臨床経験をお持ちで、日本におけるスピリチュアルケア普及に長く尽力されてきた聖学院大学教授の窪寺俊之先生にコメントをいただいた。

１.密室の人間関係

高橋　原

密室の二人

相談に乗っている相手に恋愛感情を抱かれたことがありますか？逆に、自分が相手を好きになってしまったことはありますか？どちらも、ごく当たり前に生じる得ることでしょう。人生でもっとも辛く、孤独な時に唯一親身に話を聴いてくれた理解者に対して強い好意を感じることも、そのように自分を頼りにしてくれる相手の気持ちに応えたいと思うことも、人間として自然なことであると思います。しかし、たいていそのような恋愛感情は一時的なものに過ぎず、やがて落ち着いていく種類のものであることは、多くの人が経験済みであるはずです。

一時の感情に身をまかせてしまうと、手を握ったくらいのことだと思っていても、蜜月が過ぎた後に待っているのは、裏切りをなじる非難の言葉と、「臨床宗教師に突然抱きつかれた」というセクハラ裁判かもしれません。仮にその訴えが「無実」であったとしても、それを証明する過程で、本来ケアする対象であった人により深い傷を負わせることになります。自分もダメージなしでは済みませんし、雇用先の施設や所属する組織の信用も大きく損なわれるでしょう。

宗教者の権威

こうした問題は、宗教者であるかどうかに関わりなく、密室で男女が二人きりになる状況では生じやすいことですが（同性であっても年齢が離れていても本質は同じです）、それでもなお、宗教者だからこそ考えておくべきことがあるのではないでしょうか。一つは、宗教者は（少なくとも「ホーム」では）立派な聖職者として、批判されにくい立場にいることに慣れてしまっているのではないか、ということです。

例えば二人きりの相談室で異性の信者と長い時間を過ごしたからといって疑いの目を向けられることがないとか、あるいは疑われたとしても、少々のことではそれを問題にする声が耳に入ってくることはない。そんな環境に慣れてしまっているのではないでしょうか。欧米のキリスト教会で聖職者による性的虐待が長年続いてきたという報道をしばしば見かけますが、これは密室で起こることが権威によって覆い隠されてきたことに一つの原因があります。遠い異国のことと考

えずに、自分にも生じうることだと考えておいた方がよいでしょう。常に第三者の視点を意識する必要があります。とりわけ、「アウェイ」では必要以上に批判の目が降り注いできます。

密室で生じ得るさまざまな問題を未然に防ぐためのひと工夫は、倫理講習でもたびたび取り上げられています。ドアを開けておく、間に机を挟んで座る、親密さのサインであっても安易に身体接触に頼らない、等々です。自分はやましいことはしていないから大丈夫、というのではなく、第三者の視点に立って、自分の宗教施設での行動も見直してみるとよいでしょう。

人を救いたい？

もう一つ考えてみたいのは、宗教者は苦しんでいる相手を救いたいという動機を人一倍強く持っている人たちであるということです。そのことが、被災地での貴重な働きや、臨床宗教師制度誕生の原動力となってきたことは確かでしょう。またもしかすると、それこそが宗教者の存在意義なのだから、そのような動機を強く持たなければならないと自らに言い聞かせている人もいるかも知れません。そこに落とし穴はないでしょうか。このことは、臨床宗教師が心理学的なスキルによらずにケア対象者に寄り添おうとするということとも関わってきます。それは相手を客観的に分析するのではなく、感情面での支えを大切にしようとすることです。

こんなにも自分を頼ってくれている相手から逃げてはいけない。自分に向けられた愛情には同等の愛情で応えなければ不誠実なのではないか。そんな風に考えてはいないでしょうか。また、宗教者として信頼されているという、おそらく滅多に味わったことのない喜ばしい経験に舞い上がってしまったり、この人を救うことができるのならたとえ身を滅ぼしてもかまわないという高揚した心境に陥ったことはないでしょうか。こうした使命感と混じりあった複雑な感情と恋愛感情が結びつくとさらに厄介なことになります。恋愛問題を離れても、目の前の相手を支えられるのは自分をおいて他にはない、と思い込んでしまうと困ったことになりがちです。

しかし、仮にこのような感情の機微に宗教者特有のものがあるとしても、一方で、宗教者だからこそ、こうした思考回路にはまりにくいという面もありそうです。宗教者は相談の場面で、どんなに醜い秘密でも受け止めてくれる度量の大きい存在として理想化を引受けやすい存在であることは確かです。しかし、それぞれの宗教の崇拝対象（神仏）や教祖・宗祖のことを考えてみれば、自分が人を救うなどというのはおこがましいことであり、救いとはもっと大きなもののはからいに委ねられるべきものなのだ、ということになるのではないでしょうか。それは宗教学者の想像に過ぎないかも知れませんが、いずれにせよ、相手の問題を自分だけが引受けるのだという気負いから自由になり得るのも宗教者としての特性であると考えられます。自分が臨床宗教師を志した根本的な動機を信仰や生育歴と合わせて繰り返し吟味し直すことが重要になってくるでしょう。より現実的な対応としては、情に振り回されず、自分で背負いきれない問題は積極的に同僚やケアチームと分け持とうとする姿勢が臨床宗教師には必要なことでしょう。

問題が起こったら？

さて、そうはいっても、どんなに慎重に振舞っていても、時には（セクハラ問題に限らず）手に負えない領域に足を踏み込んでしまうことがあるでしょう。人の生き死にと向き合う仕事ですから当然のことです。そんな時、最良の危機管理となるのが、いつでも相談できる相手を確保しておくことです。自分ひとりで解決しようとせずに、迅速に正直に(quickly and honestly)報告する習慣を付けておけば、仲間や組織があなたを全力で守ってくれますし、それが結局はケア対象者を守ることにも繋がります。メールアドレスの交換や施設の外で私的に会うことの危険性、記録を残しておくことの大切さなども倫理講習で繰り返し確認されていることです。もちろん、倫理委員会という相談窓口の存在も忘れてはなりません。

こんなことを書いていると、よそよそしい四角四面の面接を推奨しているようで気が引けるのですが、臨床宗教師が傾聴の専門家を名乗っているということを肝に銘じつつ、公共空間に課せられた枠内で、自分の器に合った色々な接し方や距離感を工夫すればよいと思います。臨床宗教師倫理綱領の最初の見出しに、「ケア対象者の人間として、個人としての尊厳を尊重する」とあります。これが基本なのだと考えれば少しは気が楽になるでしょうか。　　（たかはし・はら）

2.葬儀と臨床宗教師

大村哲夫

臨床宗教師が葬儀を引き受けることについては、倫理講習会で毎回も取り上げています。出席者にその是非を問うと、ほぼ全員が「問題あり」と答えます。にもかかわらず、この件に関わる問い合わせが時々あります。当人からであったり、「噂」を聞いたという会員からだったりするのです。本稿では、なぜこのことが問題となるのか考えてみたいと思います。

まず牴触しそうな倫理綱領・規約（ガイドライン）を検討します。次になぜ実際問題として葛藤するのかについて述べることとしましょう。実は、直接葬儀を禁止している項目はありません。総合的に判断すると以下の点が問題となることがわかります。

１．臨床宗教師としての適切な振る舞い、２．布教伝道の禁止、３．多重関係の禁止、４．金員の受領禁止、５．公共空間におけるルール遵守、６．地元の宗教者との友好関係保持など

倫理綱領から

臨床宗教師が葬儀を引き受けることは、公的な立場である臨床宗教師による私的（宗教的）行為です。病院や高齢者施設、避難所や復興住宅などは公共空間であり、そのルールが適用されている。病院で医師や看護師が健康食品の斡旋をしたり、学校で教師が自家の商品を販売することを想定すれば、公私混同という違和感を感じるでしょう。倫理綱領には、〈臨床宗教師としての適切な振舞〉という項目があり、次のように述べられています。

８－１　臨床宗教師は、公的な性格を有する一種の高度専門職業人である。臨床宗教師は、自らの発言に関して、それが公の立場からのものか、あるいは私の立場からのものかを適切に判断しなければならない。臨床宗教師は、その社会的役割にふさわしい、適切な振る舞いをしなければならない。

８－２　臨床宗教師は、その社会的役割の立場・地位を、乱用・悪用してはならない。（『臨床宗教師倫理綱領 2016年制定』下線は筆者。以下同じ）

また葬儀には、布教伝道の場という側面もあります。死者を弔うことを通して「教え」を伝えることは多くの宗教・宗教者が重視・実践していることです。倫理綱領には、

４－１　臨床宗教師は布教・伝道を目的として活動してはならない。また、そのような誤解を生むような行為は控えなければならない。

と明確に否定しています。また、医療者や家族、伝聞した第三者による「誤解」の可能性も考慮されなければなりません。

倫理規約（ガイドライン）から

「より具体的な注意を喚起する」（前文）として制定された倫理規約を見ると、葬儀を行うことは、

公共空間におけるルール遵守（４）、布教の禁止と地元の宗教者との友好関係の保持（６）、多重関係の禁止（７）、金員の受領（８）

などの項目に牴触する虞れがあります。

綱領と同様、規約においても、布教伝道の禁止、公共空間でのルール遵守が謳われており、臨床宗教師が「宗教者」や「個人」として、ケア対象者に会うことを「多重関係」として禁止しています。臨床宗教師としての立場には「公的関係」しかあり得ないのです。またケア対象者から金銭をもらうことは、いかなる名目でも禁止されています。

次に通常あまり意識されていませんが、地元宗教者との友好関係は重要であるので詳しく述べたいと思います。

６．臨床宗教師は、布教ととられる行為を行わず、地元の宗教者と友好関係を保たなければならない。

解説：臨床宗教師の活動は、地域の寺檀関係を損なうものとして警戒されることがある。そうした疑念を払拭し、地元の寺院や教会などとの無用なトラブルを避け、円滑で継続的な地域貢献を可能とする関係を築かなければならない。地域の宗教団体が地域の臨床宗教師活動を担えるよう、協力を求める啓発活動を行う。（「臨床宗教師倫理規約（ガイドライン）および解説」2016年制定）

この項目が生まれたのは、臨床宗教師創設以前の苦い経験によります。医療現場に宗教者を導入する試み

は、一部病院における欧米式チャプレン、ビハーラ僧の導入など先駆的取り組みが見られました。在宅緩和ケア領域でも、筆者が「臨床心理士兼チャプレン」として活動し一定の評価（たとえば、岡部健、2008「在宅緩和ケア　実践と課題」『19歳の君へ　人が生き、死ぬということ』日野原重明編著、春秋社）がされていましたが、実際に地域の病院への普及は進みませんでした。学会や研修会などの場では導入への賛意が多く聞かれたにも関わらず、地元の宗教者との具体的な協議では「理想だが現実問題として難しい」との声があがり普及しなかったのです。それは「臨床で活動する宗教者によって、檀家や信者が奪われる」という根強い警戒心があったからです。この警戒感は現在も払拭しきれていないません。葬式を臨床宗教師が引き受ければ、地域寺院にとっては「縄張り荒らし」と映り、地元寺院に対する敵対行為と見做され、協力は疎か「抵抗勢力」化に追いやることになります。そのため、地元宗教者との友好・協力体制の構築は不可欠であると言えます。臨床宗教師が実現するに至ったのは、震災という非常時への緊急対応だったからに他ならなりません。

倫理と心情のジレンマ

もう一つ、この問題が難しいのは、臨床宗教師個人の心理的な問題です。心のケアではケア対象者の「家族にも言えない悩み」を聞くこともあるなど、ケア対象者と臨床宗教師の相互関係が深くなります。その中で臨床宗教師に「最期」を託すことは、自然のなりゆきでもあるでしょう。そうしたケア対象者の心情に応えたいという臨床宗教師の心情も十分理解できます。他に信頼できる宗教者をもたないケア対象者の最期の願いを断ることは「しのびない」、「断ってよいのか」と煩悶する臨床宗教師もあるでしょう。金儲けにも布教にもならない臨床宗教師を志した会員だからこそ、むしろ悩みは深いと思われます。葬儀を引き受けることの問題が頭で分かっていても心で腑に落ちないのは、こうした心理的問題が背景にあるからだと筆者は考えています。こうした感情の葛藤には、上記のような倫理綱領・倫理規約の理解だけでは不十分です。

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」（夏目漱石『草枕』）。

倫理と心情の葛藤もこのようなものかも知れません。臨床宗教師活動を行うことは、こうした悩みに日々直面することでもあります。全く悩まない臨床宗教師がいるとすれば、倫理観に欠けるか、共感力に乏しい可能性があります。倫理に悩むことは、むしろ臨床宗教師として適性があるともいえるでしょう。

では、こうした悩みはどうしたらよいでしょうか。最もよいのは、臨床宗教師同士悩みや葛藤を率直に出し合える場を定期的にもつことでしょう。こうした相互研鑽が、一種のピア・カウンセリングのように機能し、臨床宗教師自身のケアともなります。また、会員同士のチェック機能が働き、臨床宗教師とケア対象者が蛸壺化しない風通しの良いケアに繋がります。問題事例は、けっして特殊なケースではありません。誰もが陥りやすい落とし穴であるからこそ、事例に学ぶ必要があるのです。　（おほむら・てつを）

３.組織の中での自分の姿、見えていますか？

谷山洋三

はじめに

昨年は、スポーツ界でのパワハラ問題やセクハラ問題が世間を騒がせていました。このことは、対岸の火事として放置するのではなく、臨床宗教師や宗教者の世界においても意識するべき課題です。臨床宗教師倫理綱領では＜臨床宗教師としての適切な振る舞い＞＜同僚との良好な関係の維持＞といった項目が、このような課題に関わります。

広辞苑（第七版）には、パワーハラスメントとは「職場で上司がその地位や権威を利用して部下に行ういじめや嫌がらせ。パワハラ。」と。セクシャルハラスメントは「性にかかわって人間性を傷つけること。職場や学校などで、相手の意に反して、とくに女性を

不快・苦痛な状態に追いこむ性的なことばや行為。性的いやがらせ。セクハラ。」と書かれています。

殴る、蹴る、押し倒すといった物理的な暴力は犯罪なので、論外ですが、言葉の暴力や、関係性の中で発言者が意図していない状況で生じてしまうハラスメントについては、1人1人が意識をして避ける努力をしなければなりません。今回は主にセクハラとパワハラについて、自戒を込めて書きとどめておきます。

なお、以下の内容においては、「こんな言葉を初めて認識した」ということもあるかも知れません。それは学びのチャンスですので、ぜひご自身でお調べください。

組織の中で

臨床宗教師は、公共空間でのケアを提供する時の立場ですが、臨床宗教師会（以下、会と略す）という組織においても、公共空間でスタッフと関わる時にも意識をしていただきたいと思います。ここでは、特に臨床宗教師会における関係性を想定しています。

確かに、ケア場面での関係性と、会議における関係性は同じではありません。しかし、臨床宗教師会の会議に「宗教者として」参加するのか、「臨床宗教師として」参加するのかによって、その言動が大きく異なることが容易に想像できます。極端なことを言えば、宗教者として参加するならば、自教団や自分が所属する寺社教会の都合を優先することが正しい、ということになります。そうすると、会における協力関係が成立しません。それに対して、臨床宗教師として参加すると、会のため、ケア対象者のため、そして仲間のための意見を優先することが求められます。実際には、さまざまなバランスを考慮することになりますが、会においても「宗教者」と「臨床宗教師」の立場が交錯することは避けられません。

セクハラについて

宗教界でも女性差別の問題はある程度は意識されていると思いますが、男性優位の状況が長く続いてきたために、悪い意味での「古い伝統」がまだまだ残っているのではないでしょうか。女性が宗教者としての一定の地位を得られるかどうか、については各教団で取り組むべきことなので、ここでは触れません。しかし、その「男尊女卑」的な雰囲気を臨床宗教師の世界に持ち込むことは、大きな問題があります。「女は黙っていろ」「女性の出る幕ではない」といった発言は当然NGですが、そのような雰囲気を作り出すことも問題です。

一方で、男性へのセクハラもあります（広辞苑は一般論を書いているだけです）。「男らしくない」「男性ならこうあるべき」という発言は、男性を傷つけることがあります。また、LGBTQについては、社会でも認識されつつありますが、欧米ではチャプレン自身が当事者であることも珍しくないので、臨床宗教師としても認識を深めていただきたいと思います。

パワハラについて

宗教界は「黒い巨塔」だと揶揄されることがありますが、換言すれば「権威と権力」が渦巻く世界だということでしょう（なだいなだ『権威と権力』岩波新書 は、オススメです）。権威は善用すればケアにつながりますが、悪用すればパワハラです。

注意していただきたいことは、先輩・後輩や師匠・弟子など、自教団における関係性を、会に持ち込むべきではないということです。教団内においては秩序として機能するのですが、フラットな関係が基本となる会において、このような上下関係が悪用されてはいけません。

これは少し難しいことですが、自教団のルールを会に適用することも避けるべきです。A教団（地域の集まりなど）で常識となっていることが、B教団では非常識かもしれません。臨床宗教師は、公共性を強く意識した宗教者による活動ですので、参考にするべきは、むしろ一般のNPOや社団法人、市民中心の任意団体などの運営方法です。

臨床宗教師の基本姿勢

東北大学の臨床宗教師研修・講座では、「多様な価値観を認める」「自分自身を見つめる」ということを、強く意識するよう指導しています。また、「宗教協力」「公共性の確保」「人権擁護」も重要なテーマです。ケア場面だけでなく、会における人間関係においても、これらのことを意識していただきたいと思います。

特に、権威というものは、他者から与えられるもので、権威者自身が気付きにくいことがあります。（ただし、自分から権威を欲しがる人は論外で、尊敬に値

しません。また、「虎の威を借る狐」も同様です）。会の外では宗教者として権威ある存在ですが、会の中ではフラットでありたいと思うあまり、かえって「与えられた権威」に気付かないことがあります。自分自身を見つめることは、ハラスメントを避けるためにも必要なことなのだと思います。

（たにやま・ようぞう）

コメント

窪寺俊之

臨床宗教師会は宗教者が公共空間で働くことを目的にしてできた会です。仏教、神道、キリスト教、新宗教の方々が集まっています。宗教者だから問題が起きないというのは誤解です。ケアを受ける人との間に感情的な行き違いや誤解が起きる可能性があります。そこで臨床宗教師が守るべき倫理について、この会の中軸的活動をしてきた高橋原先生、大村哲夫先生、谷山洋三先生方が必要最低限度のルールを書いてくださいました。それぞれの切り口は異なります。

高橋原先生は、密室で二人切りで会う時の倫理的問題を具体的にわかりやすく書いてくださいました。そして問題が起きる根底には、臨床宗教師の自己過信、気負い、思い込みがあると指摘しています。自分自身の中に隠れている課題を見つめ直す深い内容です。大村先生は、臨床宗教師が葬儀を頼まれた時の倫理的対応について引き受けることは、公的立場にある者が私的行為を行うことに当たると指摘。また、地域の宗教者の「縄張り荒らし」になり、友好関係を壊すものだと指摘しています。宗教者の権限の使い方を深く分析をして有益な提言をしています。谷山洋三先生は、臨床宗教師仲間で守るべき倫理について語っています。

臨床宗教師会の中では自分の教団・教派の異なる人がいるので当然互いに尊敬すべきです。自教団内での先輩・後輩、師匠・弟子の関係を臨床宗教師会の中まで持ち込まないことを提言しています。臨床宗教師会の健全な発展を願っての貴重な提言です。三人の先生方の指摘は、臨床宗教師が公共空間で活動するためにも、また、臨床宗教師同志が共に助け合うためにも重要なポイントです。

三人の先生方の提言の根底に共通している点があると感じました。

一つは、臨床宗教師がしっかりした倫理的感覚を持つことの重要性です。臨床宗教師の役割は寺院や教会を中心に働く宗教者の役割と異なる点である。伝統的宗教者は寺院や教会を中心にして教えをなし儀式を行うことを使命としてきました。それが自分を過信させて、他人（患者、被災者、気付いた人など）の人権、人格、主体性、尊厳を傷つけてしまう危険があると指摘しています。宗教者である前に一人の弱い、欠点を持つ人間としての自己理解が必要だという提言です。

もう一つは、臨床宗教師は自分が公共空間にいることを忘れないことが重要だといいます。寺院、教会から離れて宗教者が公共空間で活動するときには、人に仕えることを本務とすることである。にもかかわらず、公共空間に居ることを忘れてしまう傾向を持つ宗教者がいるという指摘です。公共空間では、宗教者は仕える人でケアを受ける人が主役です。臨床宗教師は聴く心を持って謙遜に仕える必要があります。いかなる状況にある人にも、忍耐、慈悲、望みを持って仕えることは、宗教者だからこそできることであるかもしれません。宗教者への社会的期待は大きいと感じます。だからこそ公共空間で人に仕えることを忘れず、宗教者の役割を果たす必要です。宗教者の役割をしっかりと意識して振る舞えるだけの人間的成熟さが臨床宗教師には求められると教えられました。

（くぼてら・としゆき）

日本臨床宗教師会認定臨床宗教師授与式

2019年3月4日、一般社団法人日本臨床宗教師会の第4回フォローアップ研修に合わせて開催された総会において、認定臨床宗教師の認定証授与式が行われ、島薗進会長より認定証が手渡された（於京都市龍谷大学大宮学舎）。2018年度、新たに認定されたのは26名で、制度発足以来の認定臨床宗教師の合計は171名となった。この他に、「臨床宗教師研修指導者」として登録された3名と、「臨床宗教師教育プログラム」として認定された上智大学臨床宗教師養成プログラムに証書が授与された。

認定臨床宗教師数の推移は次の通りである。

2018年3月　146名（第1回）
2018年9月　　13名
2019年3月　　13名

登録されている教育プログラムが９機関あることを考えると、増加は緩やかなものとなっている。もっとも、東北大学の2018年度臨床宗教教養講座（第1期）修了者は次回9月の認定にまわるといったタイムラグがあるので、来年度は増加率が上がる可能性もある。

全国の会員が一堂に会して行われるフォローアップ研修は年に一回のことであり、多くの参加者が活動報告、会話記録検討に事例を提出した。今回の総会では、会話記録検討会や活動記録検討会への参加によって、資格更新のための単位が加算されるといった条件の改正が行われた。認定臨床宗教師は、年間を通じて各地で行なわれているフォローアップ研修に参加しながら、5年後の資格更新を目指すこととなる。次回の総会・フォローアップ研修は東北大学を会場として2020年3月に開催される予定である。

島薗進会長と新規の認定者・登録者

第3回臨床宗教師養成講座（種智院大学）報告

研修データ
期間：2018/5/9-11 6/5-6 , 7/3-4
会場：大本山石山寺（大津市）、総本山園城寺（三井寺）（大津市）、各地医療福祉施設（実習）
主催：種智院大学臨床宗教密教センター
共催：東北大学実践宗教学寄附講座
修了者：10名(うち女性4名)
宗派内訳：真言宗各派(7)、曹洞宗(2)、大本
地域：東京、埼玉、神奈川、京都、愛媛、岡山、広島
※本研修の実施に当たっては（公財）仏教伝道協会の助成を受けました。

この養成講座は種智院大学臨床密教センター主催で行われ、東北大学実践宗教学寄附講座は、谷山准教授・大村助教の派遣という形で協力した（共催）。研修プログラムのフォーマットは東北大学で実施されていた臨床宗教師研修（1～12期）に準拠し、宗教施設（寺院）での合宿と各地施設での傾聴実習によって行われた。

現在、各地9大学機関等で臨床宗教師養成教育プログラムが認定されているが、約三ヶ月で修了できる短期集中型の講座は他にない。期間の短さにデメリットはあるにせよ、まとまった時間の確保が難しい多くの宗教者に臨床宗教師の門戸を開いていくという点で、このタイプの研修の存在意義は大きいと言える。

また、今回の研修は、従来真言宗僧侶に限っていた受講対象者を拡大し、他宗教宗派の宗教者を受け入れて行われたことも有意義であった。受講者だけでなく、スーパーヴァイザー、運営スタッフとして加わった過去の研修修了生たちも合わせて、宗教的多様性が確保された中で行われた研修であったといえる。

プログラムの詳細は臨床密教センターのウェブサイトに掲載されている「第3回臨床宗教師養成講座報告書」を参照されたい。なお、2019年度養成講座は開催されないが、以降の予定については同センターや日本臨床宗教師会のサイトに掲載される告知を確認してほしい。

2018年度履修証明プログラム報告

臨床宗教教養講座（第２期）

受講者：26名（男女比 14:12） 修了者：22名
宗教者17名、医療従事者11名（重複あり）
開講科目（インターネット授業：各90分×10コマ）
【前期】宗教学I（高橋原）、宗教学II（木村敏明）、死生学I（大村哲夫）、死生学II（谷山洋三）、宗教心理学（高橋原）、スクーリング
【後期】実践宗教学I（高橋原）、実践宗教学II（オムニバス）、宗教福祉学（谷山洋三）、応用死生学I（大村哲夫）、応用死生学II（大村哲夫）、スクーリング

臨床宗教教養講座は、認定臨床宗教師、スピリチュアルケア師（認定）の資格を得てケアの現場に出ようとする社会人、またそれらの人たちとの連携を考えている医療従事者等を対象としたものです。インターネットを通じて行われた授業の内容はグリーフケア、スピリチュアルケア、宗教文化等について幅広く扱うもので、臨床宗教師・スピリチュアルケア師として現場に出るための入門的・基礎的な内容を時間をかけて学んでいただきました。スクーリングでは授業内容の振り返りや、傾聴の入門的なグループワーク等を行ないました。下の写真は東北大学の学生も交えてのグループワークの一コマです。

2018年度教養講座の受講者の内訳は上掲の通りですが、女性と医療関係者の比率が高いのは、看護師の受講者が多かったことによります。他に臨床心理士、鍼灸師、社会福祉士等の有資格者も受講されました。宗教者は神道系が2名、キリスト教が1名、その他は仏教系でした。修了者のうち16名（うち宗教者が12名）が、2019年度の臨床宗教実践講座（第2期）へ進むことになりました。

臨床宗教実践講座（第1期）

受講者（＝修了者）：17名（男女比 11:6）
宗教者11名、医療・福祉関係者7名（重複あり）
実習：120時間　講義：10時間　グループワーク：40時間

臨床宗教実践講座は、前年度一年間の臨床宗教教養講座の修了者を対象に実施されました。受講者が各自の居住地域で実習受け入れ可能な医療福祉施設を見つけることがスタート地点です（適切な施設が見つからない場合は主催者が斡旋します）。5月から11月まで毎月、各施設で20～30時間程度の傾聴を行い、仙台市近郊の宿泊施設で行われるスクーリングで、四、五人に分かれてのグループワーク（会話記録検討）を行うことを繰り返します。

従来の臨床宗教師研修では、一日の始めと終わりに宗教儀礼体験をシェアする「日常儀礼」を実施していましたが、この講座では非宗教者も行なうことができるものとして、「スピリチュアルワーク」と名称を改めて実施しました。ヨーガ、篠笛、瞑想、朗読から、聴診器で心臓の鼓動を聴くことまで、受講者各自の工夫により面白い試みが見られました。6月には被災地（名取市）での追悼巡礼も行いました。

実践講座修了者の感想

小山田和正（日蓮宗）

２年前、何か特別なスキルを得ようと意気込んで受講の申し込みをしたように思います。以降、講座中、たくさんの講義を受け、たくさんのレポートを提出し、２年目の実習ではたくさんの時間を特別養護老人ホームで過ごしました。この間、学べば学ぶほど、経験すれば経験するほど、私を私たらしめているものが、ボロボロと剥がれ落ちていきました。それは垢が落ちる、メッキが剥がれるという類のものではなく、肉ごと削ぎ落とされていく感覚でした。最後に残ったのは、どこまでも無力で無能な自分と、それでもなお、という覚悟だったように思います。自分の人生の中でも、非常に貴重な２年間でありました。ありがとうございました。

一般的に、臨床宗教師と言った時、その思い浮かべる固まったイメージはありません。それは、様々な垣根を飛び越えて、多岐にわたって縦横無尽に活動をされている諸先輩方のご活躍に拠るものでしょう。講座では、講師先生方はもちろんのこと、共に机を並べる多種多様な背景を持つ仲間が、私の偏ったモノの見方や考え方に新たな気づきを与えてくれました。その一つひとつが「あなたならどうする？」という問いでありましたし、その一つひとつが田舎にあって私自身がどのような活動をしていくかという大きな幅のある可能性となりました。臨床宗教師という肩書きは、それ自体単体では成立せず、地域のあらゆる職種の方々との関係の中で、その肩書きが自然に与えられていくようなイメージを持っています。諸先輩方に習い、私自身も講座での学びを活かしながら、この地域において臨床宗教師と呼ばれるような関係を育んでいきたいと思います。

福間伸思（精神科病院事務部長）

仕事をしながらのスクーリングと臨床実習は、予想以上にハードなものでした。まさに実践力が養われる講座内容です。具体的には、緩和ケア病棟における臨床実習とその会話記録の作成に苦しみ、振り返り時のSVからの厳しい指摘に涙することもありました。SVや指導者からの厳しいお言葉は、毎回私の内面の弱さや逃げ腰な態度をズバッと言い当てられ、日ごろ身に付けている鎧を身ぐるみはがされたような感覚になりました。その一方で、身ぐるみをはがされた受講生同志の結束はその分強固なものとなり、年齢・性別・職業を超えて一味となることができました。苦しんだからこそ、同朋の仲間が全国にできたという、掛けがえのない人財を得ることができました。

まずは、現在の勤務場所で働く200人近いスタッフに対するケアを心掛けてまいります。医療現場で働くスタッフの燃え尽き症候群やメンタル不調を未然に防ぐため、一人ひとりの話をしっかりと傾聴し受けとめていく存在となることで、スタッフの離職や病気の予防になることを期待します。

さらには、スタッフ全員が患者・利用者・家族といった身近な方の声を聴きとり、寄り添うような態度で接することができるような組織風土を作り上げていきたいです。

加藤昌子（看護師）

2年前、教養講座を受講させていただいていた頃、私は精神科で看護師をしておりました。

そして実践講座を経た現在、大学での学びがご縁となってつながった臨床宗教師の方や同僚の看護師、家族の力を借りて、グリーフカフェさえずりの杜を立ち上げるに至りました。

私にとってこの講座は2講座で一つという感覚がとても強いです。教養講座では、私自身の中にもあるスピリチュアリティやペイン、様々な時代・様々な領域で、人間が生老病死にどう向き合ってきたのかなど、個別的な体験であっても根っこでは共通する何かにつながっていることを感じる場面が多くありました。また宗教的ケア・スピリチュアルケアが伝統文化や風習・儀礼を通して、日常の生活に溶け込み、私たち人間を癒やし、支えていた歴史などを知る機会も得られ、実践講座に進む上で大事な土壌が培われたと思っています。

このような教養講座での学びがあったので、実習を前に私は看護師という役割意識を一端緩め、生身の自分と対峙する姿勢を持てたのだと思います。

実践講座で取組んだ会話記録は、そんな私が実際に対象者さまとの関わりの中で、何に気づき、何を思い、感じ、意識的、無意識的にせよどんな関わり方をしたのか言葉に起こす作業でした。言葉に起こす時点で筆が止まる箇所がありました。そこには「整った状態」「解決された状況」を求めているのに、そうはならず、答えの見いだせない曖昧な状況があることに抗う自分がすでに現れていたのだと思います。

グループワークは、「あのときの関わり」が今ここで再現されていきます。言葉とは不思議なものだとつくづく感じました。言葉の裏にある感情は、メンバーには透けて見えているかのようでした。鋭い指摘に抵抗を感じる自分、そこには守りたい信念があり、気づいていなかった判断基

準がありました。ふいに掛けられる温かい言葉、涙があふれ出て自分が求めていたものに気づく瞬間、これは誰の為のケアだったのかと問う自分もいました。涙と共に鎧が一つ一つ剥がされていく様な感覚は痛くもあり、ありがたくもある体験でした。今ここで、メンバー各々が感じた感覚は臨床の場で、対象者さまが感じられるものかもしれません。いつのまにか主役になってしまう「この自分」を知っておくことが、必要な場所に立ち戻る最初の気づきとなるのだろうと思っています。

教養講座・実践講座を経た「今のわたし」を起点として、グリーフという人間に備わった自然な営みの傍で、同じように揺れ、戸惑いながら、それでも居続けられる自分をゆっくりと育んでいきたいと思っております。諸先生方、長い間、本当にありがとうございました。そして今後ともよろしくお願い致します。

山下雅史（禅宗単立）

私は今、寺の法務と並行して、講座の実習先だった病院と介護施設で傾聴ボランティアとしての活動を続けています。毎回、新たな出会いと発見があり、講座を通して学んだことを少しでも生かせるよう努力している日々です。僧侶という立場上、以前から様々な相談を受けることはありましたが、相手の思いに本当に寄り添えていたのか、反省しつつ現在の自分の対応を確認しています。そんな心境に至ったのも、二年間の講座のお陰なのだと思います。

今振り返ってみると、この講座は私にとって、結局のところ自分を見つめ直す時間だったのだと感じています。宗教者である前に、一人の人間としての自分の在り方を再確認するという作業を通して、他者と自分の関係性の在り方が大きく変わってきたと思います。それは家族や身近な友人に対しても顕著に現れています。以前よりも互いの距離が近くなった気がするのです。決して楽な作業ではありませんでしたが、毎回ハードなスクーリングを乗り越えられたのも、同期の皆さんの支えがあったからこそと、感謝しています。そして講座終了後も様々な情報を共有させていただき、大きな励みにもなっています。

今後は、寺という枠組みに捉われず、地域に密着した形で活動の輪を広げていきたいと願っています。

村鳥正浩（御嶽教）

長いようで短く感じる充実した時間が終了致しました。この講座を受けたからといってCMのように目にみえて体に変化があるのならわかりやすくてよいのですが、表面に出ず実習とスクーリングを繰り返している間に、少しずつ内面が変化している事を、講座が終わる頃に何となく感じることが出来ました。

この期間において普段の宗教活動では交わることがない東北大学の先生方や生徒同士でもある他の宗教者及び他業種の方々と新しいつながりができ、そこから多くのことを学ばせて頂きました。それに、実習に伺った緩和ケア病棟において入院されている患者さんやその家族、病棟のスタッフやボランティアの方々にも大変お世話になりました。多くの方に関わりながら学ぶ機会があったことをとても感謝しております。そして臨床宗教師として学んできた事を生かせるように、実習でお世話になった緩和ケア病棟でボランティアとして傾聴活動を続けていき、人の心に寄り添う傾聴をさせて頂き、日々学び自己の向上に心掛け、気軽に使われる便利のいい宗教家でもあり臨床宗教師でもありたいと思っております。

また地域の皆さんの多くに、臨床宗教師やスピリチュアルケア師という者が活動していることを知っていただけるように努力していきます。

鈴木智雄（日蓮宗）

現在は、実習で伺わせていただいていた地元の病院へ、継続した活動の申し込みをしています。また埼玉県上尾市の病院にボランティア登録をしているので、徐々に活動を再開しようと思っています。申し込みをしている病院で活動を続けることが難しいようであれば、実習申し込み時にご縁をいただいた他の病院へ活動の申し込みをしようと思っています。

実践講座を受け、改めて現場で学ばせていただくことの大きさを実感しました。教養講座でもとても多くのことを学ばせていただきましたが、実際の現場で感じる、患者さんの息づかい・言葉・しぐさの一つ一つの重み、それらを受け止める時に自身にかかる負荷など、現場でしか実感することの出来ない大きな体験がありました。またスクーリングでは、それら現場で体験したこと、こちらから発した関わり、関わりを通じて感じられたことなどを、自身がどのように受け止めているのか、それらは自身のどのような内面が関係しているのかなどを指導者と受講生同士で深めていく機会があり、決して自分一人では気づくことの出来なかった自身の内面に気づいていくことも出来ました。自身の内面に気づかされていくことは時につらさもありますが、共に学ぶ仲間がいることは大きな励みとなりました。合宿でのスクーリング時に、先生や他の受講生とざっくばらんに話すことの出来る懇親の場も大変有難い場でありました。

実践講座の受講を通して得させていただいたものを活かし、継続した活動を志し、臨床宗教師の活動の輪を広げていきたいと思います。

藤懿　希（真宗大谷派）

私は、東日本大震災の2年後に東北に転居し、津波で壊滅的な被害を受けたお寺などで、地元の人たち向けにヨーガセラピーを行ってきました。2015年に得度し、東北大学の第1期臨床宗教師教養講座に応募しました。受講途中で配偶者の転勤が決まり、現在は、九州に住んでいます。数年おきに全国を渡り歩いておりますので、その土地の生活スタイルを知り、方言が耳慣れしたころに、縁も所縁もなかったアウェイの場所が、私のホームになります。私は、九州でもヨーガ療法士として活動しています。また、ひとりの宗教者として、医療現場で傾聴活動も行っています。

2年に亘って、東北大学で臨床宗教師教養講座・実践講座を受講させていただきました。教養講座はどれも興味深いものばかりでしたし、様々な死生観に触れることができ、大変勉強になりました。実践講座では、他宗教の方々や医療、福祉関係などの方々と共に学ぶ中で、自分の信仰や価値観を大事にするように、他人の信仰や価値観を大事にするということを、身をもって学ばせていただいたように思います。この2年間は、私のターニングポイントだったと確信しています。人から見たら何も変わっていないように見えるかと思います。しかし、本講座で学んだことが、私の中に確かに存在していることを感じることがあるのです。とくに傾聴などの対人関係の場面においてです。何と表現したらいいのか分かりませんが、この学びは、私を謙虚にさせてくれましたし、希望でもありました。本当にかけがえのない学びをいただきました。講師の先生方やスタッフの方々、学びを共にしたお仲間の皆さんに感謝しています。今度ともよろしくお願いします。

中村由佳子（日蓮宗）

私は、寺庭婦人として檀信徒さんとの出会いと別れを繰り返しています。別れの際には、最後にお会いした時の会話や姿がいつも心に残り、どんな言葉をかけていたらよかったのだろう、もっと私にできることがあったのではないか？そう思っていたことが受講のきっかけでした。

この講座で、私が何か話すのではない、沈黙であってもよかったのだということを教えていただきました。私がどうして差し上げることもできない、無力な存在であるということを自覚するのだと学びました。

ここでの学びは、相手の気持ちを受け取る自分は、一体どういう自分なのか…要は自分を知るということでした。自分にはこんなところがあったのか、それは、過去におけるこんな想いが原因だったのか…と、自分自身を振り返り、本当にいろんな気付きがありました。『穴があったら入りたい』そんな場面がいっぱいありました。

先生方にはいつも優しさあふれるご指導をいただき、また、共に輪になって学んだ仲間の温かさに包まれて、なんとか一つ一つ、進んでこられたと思います。この二年間の出会いが、私にとっては何にも代えがたい、宝物になったと思います。受講を重ねる度、なんと居心地の良い、安心できる師や仲間であることかと思いました。皆さん、本当にありがとうございました。

今後も、いただいたご縁を大切に、この世を共に生きる方々と、歩んでいきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

大澤尊光（曹洞宗）

昨年度1年間教養講座にて、臨床宗教師としての基礎を学び、昨年4月からは、実践講座ということで臨床研修を通して、傾聴の実践を学んでまいりました。私は、自宅から車で15分ほどの特別養護老人ホームを研修場所として、デイサービス利用者の方々と色々とお話をさせていただき、学ばせていただきました。利用者の方々はそれぞれ立場の違う80歳以上の方で、一人暮らしの方もいれば、ご家族と生活されている方もいますし、皆それぞれに様々な悩みをお持ちでした。一見幸せそうな雰囲気な方であっても話をしてみるとその胸の内には、大きな悲しみ、苦しみを持っていることに驚かされました。傾聴活動を通して、自身の性格、癖、傾向を知ることができました。

実践講座では、グループワークを通して、仲間から客観的な意見を得ることができ、自分という人間を深く学ぶことができました。深く自分を知ることで、他者への理解を深めることができ、目標として身近な存在である自分の家族へのケアを実践したところ、少しずつ家族間の関係が良い方向に変化しているこ

とを感じることができました。身近な方へのケアを実施することで、他者に対するケアがより深まると感じました。今後も自分をよく見つめ、他者への理解をより深くし、ケアの実践に繋げていきたいと思います。

中島　豪（医師）

臨床宗教実践講座の第1期生として参加させて頂きました。私は大学病院で医師としてがん患者の治療を担当しています。担当する患者さんは治癒が期待できない病状の人も多く、抗がん治療の過程や病勢進行とともに様々な苦痛がみられるようになります。徐々に弱り動けなくなっていき、医療では対応できない苦悩の表出がみられるようになります。現代のがん医療は未だ不完全であり、終末期に近づいた患者さんに医学で対応できることはあまりにも少ないのが現状です。いま目の前にいる患者さんに、自分が出来る“なにか”を求めてこの講座を受講しました。

私には宗教的な背景はありませんが、今回のこの講座を受講して、特定の宗教に限定されない様々な宗教観、死生観、人生観に触れることができました。他の参加者と各々のスピリチュアリティ、スピリチュアルケアについて率直な意見を交わし合い、毎回深夜に及ぶ議論（飲み会）が繰り返されました。

いま、教養講座から始まって二年間の研修を終えて、自分のスピリチュアルケアについての考え方は受講前と比べて大きく変わりました。特に感覚を最大限に研ぎ澄まし自己の内面に向き合いながら対応する共感のスキルは、自分にとって良い方向に変化してきていると実感を持っています。多様な苦悩へ向き合えるようこれからも努力を重ね、今後の患者さんやご家族の反応がこの講座で学んだことの証となればと思っています。

病院という医療者以外が入りにくい閉鎖的な環境にいますが、スピリチュアルニーズの存在を常々感じており、そこに臨床宗教師やスピリチュアルケア師との協働が出来るような場の必要性を強く感じています。今回の研修で多くのつながりが出来たので、そのような場を作ることも大切なことだと思っています。

今回の講座で医師の参加は私のみでしたが、終末期に関わる患者さんを扱う医師、医療者こそ、この講座を受講して欲しいと思います。明日からの診療、患者さんやご家族との向き合い方が変わります。

坂本顕一（曹洞宗）

現在、実践講座からお世話になっている特定養護老人ホームで傾聴活動を継続しながら、系列の病院でも活動するべく調整しているところです。こうした活動が出来るのも、臨床宗教師ならではの事と改めて感じる次第です。

この2年間を振り返ると、先に受講した教養講座は、単に傾聴のスキルや知識を得るというものではなく、正に自身の死生観（宗教観）を根底から見つめ直す大変得難い機縁となりました。実践講座では、現場で実際に出た自身の言葉やその時の気持ちに対し、先生方から傾向や癖など的確な指摘を受け、自身の課題を明確に自覚することができました。この教養講座・実践講座を受講することは、『必ず自身の生き方をより鮮明に、より深めることになる』といっても過言ではありません。

国立大学でこうした講座が開かれた意義と有難みを大いに感じつつ、受講させて頂いたことに深く感謝致すところであります。誠に有り難うございました。

この講座では、臨床宗教師としてだけではなく、同時に僧侶として欠かせない資質も養われたと感じております。

今後も、僧侶として、臨床宗教師として、様々な方々と積極的に関わり合いながら、これから迎える超高齢化社会の中で、少しでも社会に益する存在（宗教者）になるよう努めて参りますので、変わらぬご指導の程何卒宜しくお願い致します。

最後に、この講座で出会った『真如の友』に心より感謝と御礼を申し上げます。またお会い出来ることを楽しみにしております。ありがとうございました。

南條光彦（曹洞宗）

『犬になりきろう！』。〈臨床宗教実践講座〉無事終了の連絡に、あらためて自分自身に確認したことです。

テレビ番組のディレクターとして多くの方々にインタビューをしてきた私は「傾聴」に関しては少し自信を持っていました。しかし、１年目〈教養講座〉の終盤になって「傾聴」について本格的に学び始めてみると、それは大きな勘違いであることに気づき、戸惑いました。

インタビューは、後で話をまとめるのが目的のため、頭で理解していきます。一方「傾聴」は、頭ではなく気持ちや心で共感していくのがポイントなのです。

実際に「傾聴」に取り組んでみると心や気持ちで共感するという感覚がわかりません！頭で理解しようとする習慣が身についてしまっているのです。スクーリングでは毎回毎回先生方に指摘され続け、自分には「傾聴」は無理かも…と思うようになっていました。

しかし、実践講座終盤「犬になりなさい」という先生の一言で、パッと目が覚めまた思いがしました。犬は頭で考えることをしませんが、飼い主が喜んでいること悲しんでいることを敏感に感じ表情や態度で共感を示します。「心や気持ち

で共感する」ということがどういうことか分かったような気がしました。

それ以降、実習他「傾聴」に臨む際は『私は犬だ』と心の中で繰り返すことで少しは「傾聴」ができるようになってきたような気がしています。

また最近、講座を受講して良かったと感じたことがありました。「傾聴」の実習先の施設長から『医療・介護関係者の勉強会で仏教の死生観と臨床宗教師について話してもらえないか』とのご依頼を頂きました。

お引受したのは良かったのですが、どんなお話をしようか？と考え始めたところ実は私が人様にお話し出来るほど《仏教の死生観》について理解していないことに今更ながら気づいたのです。

慌てて《教養講座》のテキストを引っ張り出してみました。すると、教養講座の前半でしっかりと「仏教の死生観」がテーマの授業を受けていたいのです。講座を受けていなければ自分の所属する宗派の枠を超えた「仏教の死生観」という広い範囲ではとても皆さんにお話しを披露することは出来ませんでした。

「傾聴」について実践的に学び、宗教や死生観、スピリチュアリティに関する幅広い知識を得られる本講座を受講できたことは、私の人生に随分と有意義な経験となっていると実感しております。

成田慶信（浄土真宗本願寺派）

平成31年の春から福岡県牟田病院緩和ケア病棟にて常駐の臨床宗教師として勤務させていただくことになりました。実はこの講座を受講中も週１回のペースで病棟で傾聴をさせていただいておりました。夏頃、自分自身の今後の活動の場を考え、病棟にご相談をさせていただいたとき「緩和ケア病棟に必要な職種だからこれからも一緒にやりましょう」とお声がけいただきました。

その理由は「医師や看護師とは違うケアをしてくれていると感じているから」ということでした。緩和ケア病棟は医師、看護師をはじめとした多職種のスタッフが、患者さんやそのご家族が少しでも良い時間を過ごしていただけるようにと力を尽くしている現場です。そうした方々が心を尽くしている現場で私は何か特別なことをしていたのだろうかと度々振り返ります。

私が心がけていることは、傾聴させていただいている方の感情に焦点をあて、言葉の字面でなく、はなしの行間に隠された気持ちを拾うことです。それは特別なことではないのかもしれませんが、大切なことだと心からうなずかせてくださったのがこの講座でした。講座では、自分自身と向き合うことが多く、心に大きな負担がかかるような課題もありました。そうした課題の中で多くの気づきを得ることができました。

こうした心の過程に苦しみながらも安心して向き合うことができたのは、多くの先生方が時に厳しく、そして親身に寄り添い支えてくださったからにほかなりません。講座では何か特別な傾聴のスキルを教えてくださるわけではありませんでした。それにもかかわらず大きな感謝の気持ちが残りました。それは傾聴が特別な結果を求めるものではなく、その方の今の気持ちに寄り添い続けることなのだと、先生方が身を通して伝えてくださったからだと感じています。今後も、ＦＵ研修などに参加し、振り返りや気づきをいただきながら傾聴の場に居続けたいと思います。

竹中了祥（浄土真宗本願寺派）

ある大学の心理学の教授から、臨床宗教師のことをお教えいただきました。その時は、「そんな宗教者がいるのだな」くらいに受け止めていました。自宅に戻り、何気なくテレビの電源をつけると、普段はあまり見ないはずのBSチャンネルになっていました。聞こえてきたのは「臨床宗教師の役割は、ただそこにいること」というアナウンスでした。ちょうど臨床宗教師を特集した番組が放映されていました。なぜなのか分かりませんが、気づいた時にはパソコンに向かい、臨床宗教師教養講座のページを開いていました。「これをやらなくては！！」の一念だけで願書を作成したことを思い出します。

教養講座、実践講座と受講させていただいて2年の月日を経た今、物事の受け止め方や人の見え方、聞こえ方に大きな変化をしていることに気づきます。自分自身をよく知る機縁となったことを感謝しつつ、これから多くの宗教者の方々と協力をしながら新たな扉が開いていくことを祈っています。

各地の動き

臨床宗教師会の活動報告

各地臨床宗教師会の基本情報と活動の概要を掲載します。掲載項目は次の通りです。
(1)役職者、(2)会員数、(3)認定臨床宗教師数、(4)活動の概要

北海道東北臨床宗教師会

(1)会長・金田諦應 副会長・松谷寛元、米本智昭、宮崎正美 理事・松山宏佑、奥原幹雄、新田忍澄、三浦賢翁、田中嘉章、渋谷真之、佐藤恵子、小林茂、李明信、阿部頌栄　監事・谷山洋三、吉田俊英 顧問・鈴木岩弓 事務局長・高橋悦堂 事務局次長・渋谷真之 庶務・及川寿美子 会計・吉田彦英
(2)正会員62名、準会員1名
(3)認定臨床宗教師30名
(4)隔月にて役員会を開催（一般会員参加自由の拡大役員会）。役員会に併せて研修会や会話記録検討・協働する分野の専門家による研修会の開催。
・各事業進捗状況の報告と課題の検討　　倫理的課題の検討等が中心。
2018年
　4月16日：第一回定期ＦＵ研修
　5月7日：研修会ＳＣ講義、医療法人爽秋会岡部医院研究所主任研究員（当時）相澤出氏
　7月5日：研修会ＳＣ講義、ＮＰＯ法人仙台グリーフケア研究会理事長　滑川明男氏
　11月8日、9日：総会　一泊ＦＵ開催（会話記録検討、活動報告検討、倫理講習）
2019年
　3月26日：役員会　活動記録検討会
　4月25日：会話記録検討会
　5月9日　：役員会　活動記録検討会
　7月4日　：役員会
　7月13日：日帰りFU開催（会話記録検討、活動報告検討、倫理講習）
　9月5日　：役員会　活動記録検討会
　11月14日、15日：総会　一泊ＦＵ開催予定（会話記録検討、活動報告検討、ＳＣ講義）
＊カフェデモンク：主に宮城県石巻市にて活動
　仮設住宅から復興住宅へ活動を移行。コミュニティ再生の支援
＊電話相談事業「宗教者による心の傾聴電話相談」：毎月第2、４水曜15時～18時 0120-783-643（仏教伝道協会助成事業）
＊広報活動：ＨＰとＦＢを運営。カフェデモンク開催情報、講演会情報や会員活動情報などを定期的に更新。
＊ 当会連携の対外活動
・岡部医院・岡部医院仙台：週1回　カンファレンスに参加。不定期で患者への訪問介入
・宮城県立がんセンター：週2回、ボランティアとして活動
・岩手県立中部病院：不定期、ボランティアとして活動
・「岡部医院でお世話になった家族の会」茶話会への参加
・岩手県盛岡少年院：月2回程度、非常勤職員として該当少年への面接
＊ 講演依頼 敬称略
・国際医学生連盟日本支部　　医学教育に関する委員会主催、Life　Lesson　Project「宗教と医療を学ぶイベント」講師として会員を紹介
・東北医科薬科大学若林病院　「臨床宗教師についての講演」講師として会員を紹介
＊ 名義後援
・全国ホームホスピス協会全国研修会in宮城（12月1-2日）
＊課題
　北海道・東北地方の会員を擁しており、地理的に会議・研修への参加が難しい場合もある。出来るだけ意志の疎通を図る事に配慮している。上記の理由から、現在北海道の独立を視野に話し合いが進められている。

関東臨床宗教師会

(1)代表・池内龍太郎、副代表・高橋一晃、井川裕覚（事務局長兼任）、理事・中村博武、永峯治寿、堀口哲哉、会計・木村雅恵
(2)正会員60名、準会員7名
(3)認定臨床宗教師数36名
(4)
＊カフェ・デ・モンク（上尾中央総合病院緩和ケア病棟）
　開催日：第1水曜日・第3木曜日14～16時
　参加者：臨床宗教師、スピリチュアルケア師、ティーサービスボランティアなど。
＊総会：2018年6月8日（大正大学）18:15～19:45
出席者：正会員27名、準会員3名、オブザーバー7名
＊フォローアップ研修
2018年6月8日（大正大学）
講師：伊藤文雄先生、曽根宣雄先生、谷山洋三先生、森田敬史先生
参加者：正会員29名、準会員3名、オブザーバー5名（会話記録提出者7名、活動報告提出者1名）
2018年11月28日（鶴見大学）講師：伊藤文雄先生、谷山洋三先生、大村哲夫先生

参加者：正会員20名、オブザーバー4名（会話記録提出者4名、活動報告提出者1名）
2019年1月28日（大正大学）講師：葛西賢太先生、森田敬史先生
参加者：正会員22名、準会員1名、オブザーバー6名（会話記録提出者4名、活動報告提出者1名）
＊会話記録検討会
2018年7月10日（上智大学）　講師：伊藤文雄先生
参加者：正会員3名、準会員2名、世話人1名（提出者2名）
2018年10月10日（上智大学）　講師：伊藤高章先生
参加者：正会員5名、世話人１名（提出者5名）
＊講演活動など
2018年5月18日埼玉県南部看護師長会総会・研修（川口総合病院）担当：井川裕覚
2018年7月26日院内研修（湘南第一病院）担当：井川裕覚
＊報道の記録
2018年9月19日YAHOO!ニュース特集「『死への恐怖にどう向き合うか～死期迫る人に寄り添う臨床宗教師』」
https://news.yahoo.co.jp/feature/1089
『終活読本ソナエvol.23』2019年新春号「心を打ち明ける～臨床宗教師　苦悩に耳を傾ける臨床宗教師」

関東臨床宗教師会は都心部に近いこともあり、会員数は年々増加傾向にある。資格認定者の増加に伴い、研修の機会の確保が課題となっている。活動が広がるにつれて倫理問題などへの配慮も必要であり、倫理委員会や臨床宗教師養成機関と協力しながら継続教育の機会を設けたい。

中部臨床宗教師会

中部臨床宗教師会が発足し、早いものでまもなく３年が経過します。発足当時は数名の仲間からの発足となりましたが、現在会員数は30名を越えフォローアップ研修会も盛んに行われるようになって参りました。今年度は役員が改正され新体制での活動となります。

今年度も中部臨床宗教師会では、沼口医院と連携しながら「医療と宗教（臨床宗教師）」や「生と死」「死生観」をテーマにした講義を組み合わせた形式で、フォローアップ研修会のプログラムの一部を一般にも向けて開催します。

(1)会長・武藤隆広 副会長・引田弘道、松本峰哲 事務局長・田中至道　会計・服部あずさ　役員・坂野大徹、北原密蓮　監事・倉田恒雄、不破英明 倫理委員長・森田恭一郎 顧問・沼口諭
(2)正会員：33名　准会員：1名
(3)認定臨床宗教師：22名
(4)活動の概要〈2018年度〉
＊フォローアップ研修会
第15回 6月16日 谷山洋三先生（東北大学大学院）
第16回 7月7日 越山智子先生（東京大学付属病院/看護師）
松本峰哲先生（種智院大学）
第17回 8月4日 大村哲夫先生（東北大学大学院）
第18回 9月22日 小西達也先生（武蔵野大学）
第19回 10月31日 大下大圓先生（飛騨千光寺）
＊出張カフェデモンク
7月22日「東日本復興支援チャリティ交流会」（三重県津市）
＊役員会：4回開催
〈2019年度〉
＊フォローアップ研修会（予定）
第20回 5月25日 西村幸祐先生（岐北厚生病院/医師）
第21回 6月29日 森田敬史先生（龍谷大学大学院）
第22回 7月10日 金田諦應先生（通大寺）共催 ビハーラ大垣
第23回 8月17日 大村哲夫先生（東北大学大学院）
第24回 9月4日　大下大圓先生（飛騨千光寺）
第25回 10月12日、13日 谷山洋三先生（東北大学大学院）
※北陸地方での開催（粟津温泉）
＊カフェデモンク
カフェデモンク（大垣）週3回（月・水・金　13:30-16:00）
Mie de monk（三重）（偶数月第4土曜日14:00-16:00、奇数月第4木曜18:00-20:00）

関西臨床宗教師会

(1)会長・上田禮子 副会長・村尾雄志 事務局長・中平了悟
FU研修会委員長・野々目月泉　倫理委員長・申英子
(2)会員数47名
(3)認定臨床宗教師数　33名

(4)
＊FU研修会第2回 6月20日 於龍谷大学大宮学舎
森田敬史先生 活動記録検討会のねらい
会話記録検討会　参加者8名
＊FU研修会第3回 10月9日 於崇禅寺
大村哲夫先生　臨床宗教師と倫理
会話記録検討会　参加者27名
＊第1回活動記録検討会 12月23日 於崇禅寺
打本弘祐先生　参加者9名
＊第8回会話記録検討会 1月28日 於妙昌寺
打本弘祐先生　参加者5名

＊公共の場でのカフェデモンク開催予定（第1回3月30日）
＊京都市社会福祉協議会主催のおれんじサロンでの傾聴に4月から会員が参加予定

＊きょうのモンク＜京都府＞

＊もしばなサロン＜京都市山科区＞
公共の場が漏れ落としている、終末期の悩みや死生観などの悩みを抱えている個人が直接、関西臨床宗教師会へ相談を持ちかけるというケースが２、３件あった。大阪などでは、こうした個人からの隠れているニーズに対応するために、公共の場所を借りてのカフェデモンクの模索が急務だと思う。

中国地方臨床宗教師会

⑴代表・桝野統胤　副代表・堀靖史 会計・松本宜隆
事務・朋澤融智 庶務・和田隆恩
⑵正会員15名
⑶認定臨床宗教師数 9名
⑷2018年活動状況
＊公共空間での活動
岡山県倉敷市豪雨災害支援
10月26日　倉敷市真備町　市場仮設団地、行政主催の集会にてカフェを担当 /会からの参加人数4名 地元の宗教者1名
11月14日　倉敷市真備町　みその仮設団地、行政主催の集会にてカフェを担当 /会からの参加人数5名 地元の宗教者1名
12月13日　倉敷市鶴の浦　社会福祉協議会からの依頼で、みなし仮設の方々の集会にてカフェを担当　/会からの参加人数3名 地元の宗教者1名
1月24日　倉敷市笹沖　社会福祉協議会からの依頼で、真備のボランティア支援団体主催の集会にてカフェ、傾聴を担当　/会からの参加人数 4名
＊FU研修会
11月15日 スピリチュアルケアワーカー協会との共催
講師 大下大圓先生 広島市超覚寺 参加者13名
＊会合　役員会を3カ月に1度行う
＊課題
1.倉敷市支援の形の模索　2.支援参加の人数調整(遠方の為)
3.研修会の開催(場所、頻度)　4.会則の改正と徹底
＊2019年度活動予定
・引き続き倉敷市豪雨災害支援(月に1度)
・研修会(6～7月を予定)

四国臨床宗教師会

(1)代表・童銅啓純　副代表・岩佐隆昇
(2)正会員7名　賛助会員5名
(3)認定臨床宗教師数7名
(4)
＊設立式・FU研修会 2018年4月14・15日
＊第2回FU研修会 2019年5月25・26日
現在のところ会員の資格更新必修を四国内で達成できることを目指しています。会員それぞれの事情を汲んで研修会を計画開催するこで会員の交流が生まれます、もちろん意見の相違等々問題も起きますが、それも「臨床宗教師」の原点を確認できる良い機会だととらえています。
昨年の7月豪雨は四国南東に甚大な被害がありました。災害から3ヶ月が過ぎる頃、WCRP（世界宗教者平和会議）日本事務局からお誘いがあり3度被災地の西伊予市野村に（傾聴）向かいましたが、その後は「会」としては活動していません。
今後は年１回のフォローアップ研修の開催を目指し同時に総会を開きより一層の会員の交流、研鑽に邁進したいと考えております。

野村ダム
ダム決壊を恐れて放流することで、5名の犠牲者と夥しい被害が広がった、ここ被災地に訪れるときには先ずダム堤防で犠牲者に冥福を祈る

九州臨床宗教師会

(1)前期代表世話人・樋口泰巧　2019代表世話人・金聖孝
次期代表世話人・糸山公照　ほか各県世話人とケア・継続教育委員をあわせ運営委員会を行なっております。
(2)正会員36名、ケア会員4名
(3)認定臨床宗教師数31名
(4)
＊各地緩和ケア病棟ボランティア
＊被災地カフェデモンク
熊本益城　2018/5/14追悼式・益城町広崎仮設団地集会所、

7/2益城町広崎仮設、8/27広崎仮設、9/28益城町木山仮設、10/26広崎仮設、11/20益城町広崎仮設、12/14益城町木山仮設、12/22益城町広崎仮設、2019/1/28、2/21、3/11福富仮設、4/14木山仮設追悼式。今後も月1～2回で開催予定。
朝倉市杷木仮設林田団地　2018/1/15、2/13、3/12、4/13、5/31、6/20、7/5北部九州豪雨水害追悼式・カフェデモンク 8/5キャンドルの夕べ・カフェデモンク、9/6、10/9、11/7、12/7　1/11、2/4、3/13、4/4。今後8月まで仮設団地、以降も場所を変更して月1回継続予定。
その他 2018/4/14宇城市豊野仮設住宅　復興祭 11/18在宅ホスピスフェスタ北九州参加　11/11ひらまつ病院講演 RKB今日感ニュース（朝倉カフェデモンク）2019 4/13宇城市防災減災フェスタ
＊第14回FU研修　6月8日（熊本市ルーテル大江教会）
　第15回FU研修　1月27日（唐津市妙法寺楽養の里）
＊会合の頻度、内容など
2018　1/27総会・新年会（熊本市紅蘭亭）　第１回運営委員会、1/11第2回運営委員会、5/14金田諦應師懇親会、11/14 WHO医務官スマナバルア博士交流会、2019/１/27　2019年度総会・懇親会（佐賀県唐津市）、2019第1回運営委員会 1/11（朝倉市）第2回運営委員会 2/21（熊本市）
＊九州各地の病院や放送局、被災地からのカフェ要望がたくさんいただけるようになったことは会の成長として嬉しいことではありますがマンパワーが不足している状態です。無理せず、焦らず、細く長く最後まで支援を続けていく覚悟です。これからも皆様の温かい支援をお願い申し上げます。

※各地臨床宗教師会の活動はそれぞれのウェブサイト、Facebookなどでも情報発信されています。

石巻仮設住宅カフェデモンクのフィナーレ

2019年3月26日、石巻市の仮設大橋団地集会所にて、カフェデモンクが開催されました。この団地は臨床宗教師研修の傾聴実習で何度もお世話になった場所のひとつですが、復興公営住宅の建設が進んだ結果、いよいよ閉鎖されることとなり、お別れの記念となるカフェデモンク開催となりました。

常と変わらぬ賑わいのように感じましたが、実は、500戸あまりの団地に残って暮らしているのはもう2軒だけだそうで、敷地は閑散としていました。50人ほど訪れたお客さんの多くは、現在の居住地から自動車で訪れ、懐かしい顔との再会を楽しんでおられました。最後ということで、歌あり踊りあり何でもありの楽しいイベントとして幕を閉じました。北海道東北臨床宗教師会のメンバーをはじめ、関西や九州から駆けつけた臨床宗教師の姿もありました。

これまで開催にご協力いただき、また研修の受け入れにも応じてくださった自治会の皆様、地元の皆様にあらためて感謝を申し上げます。カフェデモンクは今後も復興公営住宅をまわって続けられます。

実践宗教学寄附講座活動報告

《2018年度開講科目 前期・後期》

「臨床死生学」(大村)、「宗教と心理」(高橋)、「死生学文献講読」(高橋・大村)、「スピリチュアルケア」(谷山)、「グリーフケア」(大村)、「スピリチュアリティ」(高橋)、「ケアの実践と宗教者」(オムニバス)

《論文・寄稿》

谷山洋三（講演録）「<教育講演Ⅰ>仏教思想における愛と寛容の精神」『医療者・ケアワーカーのためのスピリチュアルケア講演録 心とたましいの叫びに応えて7　「癒しと治し」』特定非営利活動法人臨床パストラル教育研究センター、2018.6、206-219

谷山洋三（書評）「窪寺俊之著『スピリチュアルケア研究（聖学院大学出版会）を読む』『図書新聞』3356号（2018年6月23日）、2018.6、第2面

谷山洋三・森田敬史・張晨陽（研究ノート）「臨床宗教師としての活動における困難とその対応　―東北大学研修修了者への質問紙調査から―」『スピリチュアルケア研究』2号、 2018.8、61-67

谷山洋三『人は人を救えないが、「癒やす」ことはできる』河出書房新社、 2018.11、全198頁

谷山洋三「（想い出の場所）チャクマ族の山村」『東北宗教学』14号、2018.12、193-202

谷山洋三（講演録）「公共空間における宗教的資源の活用」『佛教文化学会』27号、2019.1、30-42

大村哲夫「子どもの世界と宗教性」『保育と心理臨床をつなぐ　保育者・心理職・保護者の協働をめざして』滝口俊子･井上宏子・井口眞美編著、ミネルヴァ書房、2018.7 141-142

高橋原「宗教者による心のケアと儀礼の力」『祈りと救いの臨床』４号、2018.7.25、125-136.

高橋原「大震災後の宗教者による社会貢献と「心のケア」の誕生」『いま宗教に向きあう』第２巻、岩波書店、2018.10.23、111-125.

大村哲夫「スピリチュアル・カウンセリング」「公認心理師のための職場地図」『臨床心理学』第18巻第4号金剛出版、2018、469-470

大村哲夫「『出逢い』と『ケア』」『第3回臨床宗教師養成講座報告書』種智院大学臨床密教センター、2018.9

大村哲夫「スピリチュアル・ケアとしての在宅緩和ケア：臨床宗教師の可能性」『論集』45号、2018.12

鈴木岩弓・森謙二編『現代日本の葬送と墓制　イエ亡き時代の死者のゆくえ』吉川弘文館、2018.07.1

鈴木岩弓「終わらないために」『すいとく』第768号、竹駒神社 、2018.07.1

鈴木岩弓「慰霊供養」『佼成』8、佼成出版社、2018.8.1

鈴木岩弓「転換点」『すいとく』第773号、竹駒神社、 2018.12.1

鈴木岩弓「“良き生”を生きるために」『宮城野会会報』37号、放送大学同窓会宮城野会、 2018.12

鈴木岩弓「臨床宗教師の誕生とその意義」『人道研究ジャーナル』Vol. 8、東信堂、2019.1.31

新刊書紹介

谷山洋三『人は人を救えないが、「癒やす」ことはできる』河出書房新社 (2018/11/20)

死ぬこと、生きること、看取ること、寄り添うこと、そして救うことと癒すこと。悲しみを抱えている人にとって、また、スピリチュアルケア、グリーフケアに関わる人たちにとって、心構えや考え方を整理するのに役立つヒント集の語りおろしです。

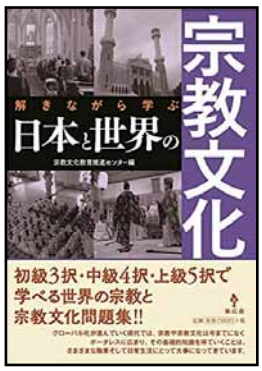
金田諦応『傾聴のコツ: 話を「否定せず、遮らず、拒まず』 (知的生きかた文庫) 三笠書房(2018/12/22)

家庭で、職場で、ちゃんと人の話を「聴く」ことができていますか？ カフェデモンクのマスターが、 宗教者としての経験を踏まえて「傾聴」のコツを教えてくれる本です。 もちろん標準語で書かれていますが、カフェでの金田さんの語り口を思い浮かべながら読んで下さい。

天野和公『その悲しみに寄り添えたなら』イースト・プレス (2018/9/16)

「仙台在住アラフォー主婦」である天野和公さんがなぜ臨床宗教師に？というところからはじまって、臨床宗教師研修での経験を人生のなかでどう受け止めているのかを、コミックエッセイという形で表現しています。みなさんご存知のあの方ももちろん登場します。

『解きながら学ぶ日本と世界の宗教文化』宗教文化教育推進センター編(2019/3/20)



選択式の宗教クイズが並ぶ、問題集です。楽しみながら読破すると、物知りになるばかりでなく、「宗教文化士」認定試験に合格できてしまいます。多様な信仰を持つ人々と関わる実践者にとっても、たいへん役に立つこと間違いなしです。

寄附者

東北大学文学研究科実践宗教学寄附講座は宗教界など各方面からの寄附金によって維持運営されています。寄附者の方々をここに記し感謝申し上げます。

宗教法人中山身語正宗
日 本 基 督 教 団
南西ドイツ宣教会
(EMS: Evangelical Mission in Solidarity)
宮城県宗教法人連絡協議会
全真言宗青年連盟
日本ナザレン教団
宗教法人みんなの寺
融通念佛宗音羽山観音寺
浄土真宗本願寺派真覚寺
真宗大谷派常念寺
天台真盛宗新光寺
天台真盛宗西念寺
融通念佛宗西方寺
曹洞宗島田地蔵寺
真言宗智山派大聖寺
龍谷大学実践真宗学研究科教員有志
宗教法人孝道山本仏殿
宗教法人妙光寺
医療法人徳養会
宗教法人平間寺
日本宗教連盟
日蓮宗実相寺
日蓮宗妙興寺
清水寺
秩父神社
竹駒神社
神習教
念法眞教
日蓮宗立像寺
曹洞宗崇禅寺
聖観音宗浅草寺
日蓮宗法音寺
曹洞宗洞林寺
應典院秋田光彦
天台宗円満寺
明川寺
有限会社仏教企画
曹洞宗北海道管区
密教２１フォーラム
日蓮宗高応寺
その他の方々
公益財団法人世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会
立正佼成会一食平和基金
真宗教団連合
真如苑
公益財団法人 新日本宗教団体連合会
一般財団法人　ありがとうインターナショナル
日本キリスト教協議会エキュメニカル震災対策室
財団法人東北ディアコニア
特定非営利活動法人神道国際学会
特定非営利活動法人世界開発協力機構

当講座は、全日本仏教会の「推薦団体」、日本宗教連盟の「後援団体」として認定を受けています。
ご寄附のお申し込みにつきましては下記までお問い合わせください。なお、寄附金には法人税法・所得税法による税制上の優遇措置があります。

東北大学文学研究科内実践宗教学寄附講座
TEL: 022-795-3831(FAX兼)
E-mail: j-shukyo@g-mail.tohoku-university.jp

谷山洋三准教授総長教育賞受賞！

２０１９年３月２７日、カメイアリーナ仙台において東北大学授賞式が行われ、谷山洋三准教授が総長教育賞を受賞しました。

この賞は東北大学の教育理念に基づき、誠意と熱意をもって職務に取り組み、優れた教育の成果を挙げた教職員を表彰するものです。実践宗教学寄附講座としては2012年の講座開設以来、谷山准教授が学内外における八面六臂の活躍で率いてきた臨床宗教師育成事業の意義も高く評価されたものであると考え、この受賞を喜びたいと思います。今後ともご指導・ご支援のほどよろしくお願い

東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター第13号
編集・発行 東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座
2019年4月1日（第1刷）
（このニュースレターのPDF版は右記サイトから閲覧できます）

各地臨床宗教師会連絡先

北海道東北　ht.rinshushikai@gmail.com
関東　kanto.rinsyo.syukyoshi@gmail.com
中部　chubu.rinsyu@gmail.com
関西　info.kansai.chaplain@gmail.com
中国地方　ch5rinshu@yahoo.co.jp
四国　p005@me.com
九州　k.rinsyu@gmail.com

日本臨床宗教師会事務局
sicj@g-mail.tohoku-university.jp

実践宗教学寄附講座

主任教授　高橋　原　（兼任：死生学・実践宗教学）
教授　木村敏明　（兼任：宗教学）
准教授　谷山洋三　（兼任：宗教学, 死生学・実践宗教学）
准教授　大村哲夫
顧問　鈴木岩弓　（兼任：教養教育院 総長特命教授）

980-8576
宮城県仙台市青葉区川内27-1
東北大学文学研究科内
実践宗教学寄附講座
022-795-3831(T/F)
j-shukyo@g-mail.tohoku-university.jp
http://www2.sal.tohoku.ac.jp/p-religion/